
LH

MP5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LH

【Nコード】

N48680

【作者名】

MP5

【あらすじ】

高校一年生で演劇部に所属する『宮下享』は充実した日々を過ごしていた。

何一つ不自由無く、ただ過ぎていく時間。

しかしそんな日々は、ある日学校の前で出会った少女とともに崩れていく。

徐々にその少女に惹かれる宮下。深まる疑念。
そして散っていく、最後の恋心。

プロローグ

目を開ける。

腹部が焼けるように痛い。

どうしてこうなったのか分からない。

——分からない？

分かっているじゃないか。

あの時、あの少女に出会わなければ……。

声が聞こえる。きつとあの少女の声だ。

笑っている、笑っている、笑っている——。

誰かが叫びながら部屋に入ってくる。多分警察。

でも、もう遅い。意識が朦朧としてくる。

警察が僕の名前を連呼している。

何で僕の名前を知っているんだろう？

そうか、夢なんだ。全部、夢。少女に出会ったのも、今日の出来

事も、全部。悪い夢を見ているだけなんだ。もう一度、目を閉じよ

う。そうすればきっと、こんな悪い夢から覚めるから……。

変わらぬ日々

「……はあ」

つい、溜め息が漏れる。何で僕がこんな事をしなければならないのだろう。

「ほら、溜め息なんて吐かない。はやく台本考えてよー?」

隣に立っているクラスメート『尾崎奈緒』が口うるさく喋ってくる。その手には何故か三〇センチはあるハリセンが握られている。

今、僕は劇で使う台本を考えている。部は演劇。普段は大人数で考えているのだが、今は文化祭も終わり、今年最後の定期テストが迫っているため、部活がない。しかし演劇部は近日、近くの中学校でこの学校の素晴らしさを伝える為の劇をするため、特別に残留することが出来る。しかし流石は定期テスト前。参加人数は乏しく、今や参加者は僕と尾崎だけだ。

「しかし、尾崎は勉強しなくて良いのか? 前回と前々回のテストで赤点がどうのこうので騒いでたじゃないか」

台本を考えているのは僕だけなのだから、この空間に二人も人は要らない。正直早く帰って欲しい。そういった意味を含めてそう言った。

「勉強したって無駄だから。ほら、私馬鹿だし」

尾崎が机の上に腰を降ろし、逆の手のひらでハリセンをポンポンと叩く。

「そりゃあ、しなかったらそうなるよ……」

尾崎と知り合ってまだ七ヶ月ちよつとだが、彼女が真面目に勉強をしている姿など見た事がない。

「それより、早く台本を考えてよー。頭良いんでしょ?」

「そんなに頭良く無いよ。それに、頭良くてそんなすぐに思いつかないって……」

この高校の素晴らしさなんて分からない。大体入学して七ヶ月ち

よつとの一年生が考える事じゃ無いと思う。

「もー、そんなこと言わずにさ、頼むよー」

「分かった分かった」

ペンを机に置き、立ち上がる。

「あれ、どうしたの？」

「ちよつと気分転換。散歩してくる」

教室のドアを開け、廊下に出る。廊下は寂しく、何より寒々しい。

「そっか、もうすぐ冬か……」

今は十一月中旬。もうすぐ秋も終わり、冬だ。

手をポケットに入れ、寒さを凌ぎながら階下へと向かう。

下駄箱で外靴と上履きを取り替え、外に向かう。校庭は寂しい。普段ならサッカー部や野球部が騒々しく練習しているのに。

外靴をしっかりと履き、校庭をぐるりと回り学校の門を下る。

こんなにあつさり出られるなら鞆を持ってくれば良かった。でも尾崎が許さないか。

学校の門の前にある階段を降り、周りを歩く。何時も見えている風景でも、誰も居ないときに見れば違う風景に思える。

でもこの学校の良いところなんて思いつかない。こうしてみれば校舎は大きいけど、設備は標準より下って感じだし。一つあるとすれば、自然が多いということだ。

でも、そんなの劇に出来ないよな……。

あ、でも自然界の動物の話とか……。うん、この学校が関係無いかというより、その自然というのもそんなに凄くはない。ただ、ちよつと学校の周りに木や花が有るだけで――

「ん……？」

胸の辺りに、妙な感触。

急いで右側に向けていた視線を正面に戻す。

そこには、額を押さえた少女が立っていた。

「え……？ あ、そのすみません」

この少女が額を押さえているのはおそらく僕にぶつかったからだ

ろう。もしかしたら違つかもしれないけど、念のために謝罪の言葉を述べた。

「いえ……こちらこそすみません」

少女が後ずさる。すると、少女の姿がはつきりと分かった。

この時期には珍しく、黄色のワンピースを着ている。それ以外は普通の……いや、そういうには美しすぎた。

「貴方は……この学校の生徒ですか？」

少女が僕に問う。

「え？ あ、はい。そうですね——」

どうしてそんな事を？ と思いながらも答えた。

「そうですね。ありがとうございます」

ぺこり、と一礼。

「それでは、すみませんでした」

少女はそれだけを言うのと、その場から立ち去った。

……可愛かったな。また、会えたりしないだろうか？ 学校とか聞いてきたし、割と……なんて、そんな事ないか。あんな短時間だったし。

「……つと、」

そろそろ戻らないと。もう結構時間が経っただろう。

「ん、」

教室に戻ろうと振り返ったとき、コッソ、と足に何かが当たる。

拾い上げてみる。これは……、

「財布、かな」

ピンク色の可愛い財布。しかも真ん中には熊のワッペンみたいなのが貼ってあった。——さっきの少女のだろうか？ 後で警察に届けよう。そう思い、財布をポケットに仕舞った。

「おっそーい！」

教室に戻ってドアを開けた時、顔面に何かが飛んできた。鞆だった。中の教科書や弁当箱などが当たり、普通に痛い。

「遅いつて、そんなに……、」

落ちる前に鞆をキャッチし、教室の時計を見る。五十分程経っている。そんなに経っていただろうか？　というか、何で電気や暖房器具が消えているんだろう？

「何でつて、もう最終下校時刻だよ」

そう聞いてみると、尾崎はそう答えた。そうか、もうそんな時間なのか。

「宮下くんは今日、何か用事ある？　無いなら一緒に帰らない？」

「あー、ごめん。今日はちょっと用事があるから無理」

警察にあの財布を届けないといけない。

「え、そうなの？　何なに、女の子の用事？」

「違うよ。ちょっとした用事」

まあ、関係が有るか無いかと言われれば有る、何だけれども。

「そっか、残念」

尾崎は不満気に口を尖らせて言った。

結局、尾崎とは学校の前まで歩き、そこで別れた。

変わらぬ日々（後書き）

初めましての方、久しぶりの方、どうもです。

えー、まず初めに断っておきます。

ゲームで『LucentHert（略称LH）』というのがあり
みたいですが、その作品との関連性はありません。ましてやパクリ
でもありません。

それだけです。では、これからも宜しくお願いします。

忘れ物

尾崎が視界から消え、暫く経った後、ポケットから財布を取り出し、それを眺めた。何度見ても可愛かった。

「交番、何処だっけ……」

財布を眺めながら呟く。交番なんて滅多に行かないから場所をあまり知らない。道を訊ねる場合は交番に行くのが良いのだけど……まあそんな馬鹿な事を考えてる場合でも無い。

確かこのまま左に歩いていった場所に有ったと思う。右の道は通学路で、普段交番なんて見かけない。だとすれば消去法で左の道だろう。

財布をポケットに仕舞い、歩を進めた。

「——あ、あつた」

歩き始めて十数分後。交番に着いた。

「失礼します」

戸をコンコンと叩き、開ける。中には二人ほどの男性が椅子に座っていた。

「お、宮下。どうした、自首しにでも来たのか？」

警官である『高橋一樹』が笑いながら言った。

高橋の近くに座る男性は『自首』という言葉に反応せず、ずっと資料に視線を向けていた。恐らくこういう冗談には馴れているのだろう。

「……違いますよ。落とし物を届けに来ただけですよ」

この高橋一樹は職業柄、父と関係が深く、その為僕とも関係が深い。昔はよく遊んだものだ。だが、こういった場所で会う事は少ない。まあ、こんな場所で会う事が多かつたら困るんだけども。

ポケットから財布を取り出し、机の上に置く。

「お、財布か。何処で拾った？」

「木下高校の前です」

木下高等学園。それは僕が通う学校だ。持ち主の事も言おうと思
ったが、確証もないし、何より名前も知らないので止めた。

「へえ、随分と派手な財布だな」

高橋が財布を眺めながら言う。まあ中年男性からすればそうなの
だろう。

「では、失礼しました」

一礼してから踵を返す。落とし物を届けた事がないからどうして
いいか分からないが、多分これでもう大丈夫だろう。落とし物も届
けたし。

「あ、待て待て」

高橋に呼び止められ、振り返る。

高橋は机を人差し指で叩きながら、

「盗んだ金、置いてけよ」

「……何も盗ってませんよ」

そのまま帰ろうと思ったが、どうやら呼び止めたのは冗談を言う
ためでは無かったらしい。書類に色々と記入しなければならなら
ない。結局、面倒な手続きを終えてから交番を後にした。

ふああ、と欠伸をしながら背筋を伸ばす。疲れが一気に身体から
抜けた様な感覚がした。

「随分とお疲れのようっすね」

現時刻は午後七時半。この時間で疲れが溜まっていない訳がない。
「後半日もあると考えると逃げ出したくなるぜ。どうする、逃避行
でもするか？」

椅子の背もたれによっかかりながら椅子をギシギシと揺らす。

「いいっすねえ」

高橋の隣の机で資料整理をしている『小野哲也』が答える。

正しくは答える、というよりも受け流しただけだった。

「にしても、暇だな」

此処最近事件があまり無い。そりゃあちよつとした騒動や事故はあるが、殺人事件などはあまり無かった。

「それだけ平和って事ですよ」

「まあ、そうだが暇なん——ん、」

高橋が言葉を止める。戸の外に人影があつた。

「すみません」

戸がガラガラと開く。

そこには黄色のワンピースを着た黒長髪の女性が立っていた。

「どうしました？」

小野が問う。

「すみません、ちよつと落とし物をしてしまったのですが……」

「落とし物ですか。どのような？」

小野が一枚の用紙を取り出す。紛失物の特徴をまとめた用紙だ。

「財布です。ピンク色で真ん中にクマのワッペンが付いてます」

「ピンク色でクマのワッペンですね。少し待って下さい」

ピンク色でクマのワッペン。それって——

「宮下が届けくれた財布じゃないのか？」

用紙を見つめる小野に話掛ける。

「え？ あ……そうですね。ええつと確か、」

小野が机の引き出しを開く。そしてピンク色の財布を取り出し、少女に渡す。

「コチラで間違いないでしょうか？」

「ええ、そうです。間違いありません」

財布の中を覗きながら少女は答えた。

「では、コチラの用紙に記入をお願いします」

小野はそういいながら一枚の用紙とペンを少女の前に差し出した。

「では、失礼しました」

少女が一礼し、戸を開けて外へと出る。面倒な手続きだが、別に時間をそれほど要するわけではない。時間は十数分と掛からなかつ

た。

「……というか、こんな時間に落し物の受け渡してアリなんですか？」

小野が頭を掻きながら問う。

「さあ。でも確か午後五時半ぐらいまでじゃなかったか？ 受け渡しの間」

「ええ？ まじっすか？ まいったな……」

「まあ最悪、上に怒鳴られるだけだろ。大したことないだろ」

「まあ、そうっすよね」

黒いコートを着ながら小野は頷いた。

「うん？ どうした急にコートなんか着て」

「パトロールに行つてきます。暇ですし」

ふーん、と頷きながら先ほど少女が記入した用紙に目をやる。名前やら連絡先やらが書いてある。にしても変わった名前だ。他人の名前にケチ付けるのよくないが、日本人には似合わない——つて、

「暇つぶしにパトロールに行くなよ。お前、絶対ファミレスとか寄るだろ。あの行きつけの」

「あ、バレました？」

まるで悪戯がばれた時の子供のような顔で小野が開き直る。

「ふざけんな。警官がそんな事して良いと思つてんのか。どけ、俺が行く」

「結局行くんじゃないっすか！」

そんな冗談には付き合つてられないと言わんばかりに小野は戸を開け、外に飛び出した。

「ちゃんとパトロールしてきますから。留守番頼みますよー」

「うるせー、誰に言つてんだ」

机の上に置いてあつた用紙を仕舞い、椅子に腰を降ろした。

シナリオ

誰も居ない、まだ日も昇って間もない午前六時。

僕は鞆を肩に掛けながら道を歩く。向かうのは学校。昨夜、尾崎から電話があつたのだ。台本を書くから午前六時半に学校に来て、と。

でも台本を書くのは二人——実質的には僕しか考えて居ないのだが——だけなのだから、別に電話でも良いのでは無いかと思ひ、そう言つたのだが、直接じゃ無いと駄目だと言われ一方的に通話を切られた。まあ、確かに直接の方が間違ひや勘違いも無いし、なにより意見を言いやすい。尾崎が考えてくれるようになったのだから別にいいか。

にしても、寒い。

朝というのもあるのだが、なにより人が全く居ない。偶に老人とかには会ふのだが、学生には全く会わない。まあ定期テスト前で朝練が無いのだから仕方が無いか。

——というか僕も勉強しないと不味い。

別に頭が悪いという訳では無いが、流石に勉強しないのは不味い。鞆から英語の教科書を取り出し、それを読み始めた。

教室の戸を開ける。今まで感じていた冷氣とは全く正反対の暖気が教室から流れでる。

「あ、おはよー」

椅子に座りながら尾崎が言う。

「あはよう。……随分早いね」

待ち合わせ時刻は午前六時半。そして現時刻は午前六時二十五分。この暖かさから想像するに、尾崎がこの教室に来たのは随分前だ。

「そう？ 普通じゃないかな」

尾崎は笑いながら答えた。

まあ、早く来てくれた方が助かる。寒い中で暖房器具をつけるのは――って、もしかして尾崎が早くにこの教室に来たのは僕の為……って、そんな訳無いか。

「じゃあ、早速シナリオを考えようか」

鞆を机の横に掛け、尾崎の正面に座る。

「うん」

頷きながら、尾崎は用紙とボールペンを机の上に置いた。

「よし、終わったー！」

尾崎が両手を挙げて椅子の背もたれによりかかる。

「良いのかな……こんな話で」

僕はシナリオの大筋が書かれた用紙を見る。

出来上がったシナリオは『この学校の校舎が悪の校舎組織と戦う』といった幼稚園児でも苦笑しそうな内容だ。

もはやこの高校は関係ないし、組織というのが敵は一人だけだし。

というか悪の校舎って。まあほかにも突っ込み所はあるんだけど。

「まあ、いいんじゃない？ 他に思いつかないし」

そう聞くと、尾崎はそう答えた。

「こんなの、絶対先輩に破かれるよ……」

「まあ、考えて無い人にとにかく言われる筋合いは無いよ」

そつなのかも知れないけど――というより、

「……眠い」

尾崎が欠伸交じりに呟く。

「……」

現時刻は午前七時半。あれから一時間が経つ。朝早くに起きて一時間もこんな事をしていたら普通に眠くなる。しかもこの温度。眠るなという方が無理な話である。

結局、尾崎と向かいあう形で寝てしまった。

起きた時、クラスの皆にからかわれたのはいうまでも無かった。

「尾崎、今日はどうするんだ？」

放課後。尾崎に問い掛ける。台本どうする？ という意味だ。

別に大筋は一応出来たのだから急ぐ必要はないが、念の為聞いた。
「別に急ぐ必要はもう無いよね。今日は良いんじゃないかな。ほら、テスト勉強だつてあるし。それに私、用事があるから」

「そう。じゃあ帰るよ」

バイバイ、と僕は手を振りながら教室を出た。

学校の門を下り、道を歩く。そういえば、昨日は此処であの少女に会ったんだつたな。そして、また会えないかなつて思った。まあ、そんな事は有り得ない。

さて、と背伸びをする。

テスト勉強頑張らないとな。

そう思つて歩を早めた時だつた。背後から、聞こえた。声が。

「すみません」

二度だけ聞いた事のある声。だけれど頭の中に鮮明に覚えている声。

振り返ると、そこには少女が立っていた。

昨日出会つた——少女だつた。

ファミレス

「貴方は……」

流石にワンピースなんかじゃ無く、普通に長袖の服を着ていたが……間違いなく昨日の少女だった。驚いた。まさか本当の出逢えるとは……、

「貴方、ですよ？ 私の財布を届けてくれたの。ええっと……宮下さん、でしたっけ？ ありがとうございます」

やっぱり昨日の財布は此の少女のだったか。……あれ、どうして僕の名を知っているんだ？

「あ、名前は交番で聞きました。……間違っていましたか？」

僕が怪訝そうな顔をしていると、少女は言った。

恐らく……というか九分九厘高橋さんが言ったのだろう。

「あ、そうでしたか。いえ、そうですよ。あつてます。ええっと……、」

少女が僕の名前を知っていたとしても、僕は少女の名前を知らない。どう呼べばいいか迷った。

「そうですか。良かった。あ、私の名前は『木原紗雪』です。紗織りの『紗』に『雪』と書いて『さゆき』です。財布を届けてくれてありがとうございます」

「木原紗雪さんですか。いえ、当然の事をしたまでです」

と、格好を付けてみる。……実際に格好が付いているかは定かでは無かったが。

「それでも、あろがとうございます。それで、その……お礼をしたいのですが、今日って今から何か用事とかありますか？」

「お礼ですか？ そんな大したこととしてませんけど……」

実際、財布を拾って届けた。それだけだ。

「お礼をしたいんですけど……駄目ですか？」

口元に袖を当て、首を傾げる。可愛い。

「え、あ、その……じゃあ、お言葉に甘えて」

「良かった。じゃあ、ちょっとついてきてくれますか？」

そついうと木原さんは踵を返し、歩を進めた。

「着きました」

木原さんがそついい、立ち止まる。僕もそれに続いて立ち止まった。

眼前には小さなファミレスがあった。一般的なのと比べれば小さいというだけで、それほど小さくは無いけど。

「此処は？」

木原さんに問う。

「ファミレスです。私行きつけの」

店内は空いていた。平日でまだ……いやもう午後三時なのだから仕方が無いのだろう。

出入り口に一番近い席に向かいあうように座る。

「何でも頼んで下さい。お礼ですから。あ、当然おごりますよ」

「あ、はい。じゃあ……、」

お冷を運んできた店員に注文を頼む。

「このミートパスタと、」

木原さんを見る。意図を察したらしく、

「あ、じゃあ私も同じ物を」

「かしこまりました。注文を確認します。ミートパスタがお二つ。で宜しいですか？」

「はい」

僕は頷いた。

「良いんですか？ ミートパスタなんかで」

ミートパスタはサイドメニュー何かを抜かせばメニューの中で値段が一番安かった。幾ら奢りだとはいえ、高い物を頼むのは悪いだろう。

「ええ。ミートパスタは好物なので」

勿論嘘だったが、気を使わせない為にそう答えた。まあ、別段嫌いという訳でもなかった。

注文が届くのを待ちながら、お冷を口にする。そういえば、此处……、

「店員が女性だけだ」

偶然かも知れないけど、店員が皆女性だった。

「ここ、店員はみんな女性なんですよ。女性でも入りやすいように、だそうですよ」

「へえ……そうなんだ」

そうか、だからさっき『行きつけの』と言ったのか。

しかし……だとしたら客が居ない今、男性は僕だけという事になる。何だか気まずかった。多分、休日の昼間とかでも男性客は少ないに違いない。

そんな僕の心を表情で悟ったのか、木原さんは優しく微笑んだ。

注文が届いてから、僕と木原さんは他愛のない会話をした。

どうやら木原さんは僕と同じく高校生で、この近くの女子校に通っているらしい。

「今日はありがとうございました」

食事を終え、店を出た所で感謝の言葉を述べる。

「いえ、こちらこそ財布のこと、ありがとうございました」

ペコリ、と一礼。

「それでは、さようなら」

手振りながら木原さんはその場を後にした。

確か昨日はこんな時に「また明日あいたいな」とか思っていた。また祈ればあえるだろうか。

まあ、この付近の学校に通ってるみたいだし……あおうと思えばあえるのかな。

「さあ」と背伸び。

テスト勉強も残っているから帰らなければ。しかし、此处何処だ？

その後店に戻り、店員に現在地が何処か聞いた。怪訝そうな顔をされたのは多分きのせいだろう。

殺人事件

十一月二十日、午後七時半。つまり、宮下と木原がファミレスで食事をした日の夜。

人の通りが少ない夜の公園。現在そこは街と同じく騒々しかった。その公園の前に、一台のパトカーが止まる。既に数台のパトカーが止まっているのだが。

警官が数名、パトカーから降りる。そして野次馬の群がる公園に向かう。

全く、この手の情報の耳の早さは流石を通り越して呆れる。

「どうだ？」

公園に居る警官の一人、小野に話しかける。

「あ、高橋さん。……どうしたもこうしたも、御覧の通りですよ」

小野が直立姿勢で言う。普段はふざけた調子の男だが、こういう時ばかりは流石というか当たり前というか——きっちりとする。小野の前に倒れている死体に目をやる。

「此は……惨いな」

死体は文字どおり八つ裂きになっていた。何とか原型を止めている、といった感じだ。

「被害者は？」

小野に問う。

「神田武、四十二歳だそうです。付近に落ちている鞆の中の免許証から得ました」

俺の問いに小野がそう答える。

ふーん、と相槌をうち、近場の警官にあれやこれやと指示をする。「どうします？ 昨日先輩が『暇だ』なんて言っちゃったから……」

そんなとき、小野が俺にしか聞こえない声で話しかけてくる。

「こんな時に、そんな冗談言つなよ」

呟き、死体の前に屈み込む。

それにしても、

「――恐ろしい時代になったものだな」

定期テスト二日目。

朝、教室で僕は教科書で最後の復習をしていた。結局テスト期間でまともに勉強したのは今日を含めて三日だけだった。まあ、以前から範囲は大凡分かっており、予め勉強していたから――まあ何とかなるだろう。

「ねー、知ってる？ この間この付近で殺人事件があったって」

教室の片隅で、女子生徒が談笑していた。

殺人事件。全国的には珍しくない話だが、この地域では最近、殺人事件などと言う話はあまり聞かなかった。

「知ってる知ってる！ 絞殺された後に八つ裂きにされたんだって！」

幾ら無惨な状態でも、殺人は殺人。珍しい話では無い。だから、あまりそんな話に興味は無かった。

やがて、聞きなれた電子音が聞こえる。休み時間終了のチャイムだった。

さて、頑張るか――

そう呟きながら、背伸びをした。

テスト

テスト終了を知らせるチャイムが鳴り、皆一斉にペンを置く。最後の教科だった。

用紙を集め終わり、教師が教室を出る。出たのと同時に、皆一斉に騒いだした。「アレが良かった」やら「アレが悪かった」やら。

「どうだった？ テスト」

背後から声が聞こえる。尾崎だった。

「まあまあ、かな」

振り返り、そう答える。実際、思ったほど悪くは無かった。

ふーん、と尾崎は聞いたくせに興味無さ気に答えた。恐らくあまり出来は良く無かったのだろう。

「今日って、部活無いよね？」

何となく気まずかった。話題を変えるために尾崎に問う。

「うん。明日——土曜日から再開だってさ」

「そう」

と、椅子の下に置いてあった教科書類を鞆につめた。

やがて、担任が教室に入っていて、黒板の前に立った。

尾崎は「また後で」と手を降りながら自分の椅子に戻った。

帰りのホームルームも終わり、さようならの挨拶をしてやがて放課後となる。

「ねえ、一緒に帰らない？」

背後から話しかけてくるのは尾崎だった。

「ごめん。今日は用事があるから無理」

振り返り、そう答えた。母から買い物を頼まれていた。

「えー、また？」

そういえば、以前もこんな事を言った様な気がする。確か財布を拾った日だ。

「そう。買い物を頼まれてて」

「それなら仕方がないけど……まあ、また明日ね」

手を振り、尾崎は教室から出ていった。

校門を下った先にある階段を降りながら買い物メモを開く。今日の夕飯と思われる食材、口紅やら何やらよく分からない化粧品などが書かれてあった。食材はともかく、化粧品を頼むとは……大して化粧にこだわりは無いらしい。

「……つと」

階段を降りた先をちよつと歩いた地点で止まる。危うく普通に帰るところだった。スーパーに行くには反対側の道を歩かないとかなり遠回りになってしまう。

振り返り、歩を進める。

そつえば、この先には交番があつた筈だ。そつだ、ついでに寄つていこう。

聞きたいこともあるし。

交番の戸を、曲げた人差し指で叩き、開ける。

「失礼します」

中にはこの間と全く変わらない人たちが座つていた。高橋さんと、名の知らない男性。

「おう、どうした。最近、よく来るな」

高橋さんが書類をまとめていた手を止め、言つた。

「ちよつと聞きたいことがあります」

戸を閉め、改まる。

「此の付近に、女子校つて……ありましたっけ？」

女子校。木原さんはその学生だと言つていた。しかし、女子校なんてこの付近ではあまり見かけない。だから、聞いた。

「女子校？ ……どうした、お前。堂々と交番に犯行予告でもしに来たのか？」

「……そんな如何わしい目的じゃないですよ。只、気になったので何となく」

そう返す。冗談には突っ込まない方がいいのだ。

「ふーん、そうか。というか、自分で調べるよ、それぐらい」と言いつつ、高橋さんは引き出しから地図を取り出した。

「調べるとか、そういうの苦手で」

地図の見方とか、よく分かりませんし、と付け足す。

「ええっと、女子校だったか。ああ、有るな」

「有るんですか」

少しだけ、安心した。少なからず『もしかして嘔吐かれてるんじゃない』という気持ちがあったのだ。

「ありがとうございます。じゃあ、失礼します」

と、戸を開ける。場所も聞きたかったけど、早く買い物に行かないと「遅い」と母に怒られそうな気がしたので止めた。それに有るとわかっていいるなら幾ら苦手でも探せるだろう。

「あつ、ちょ——」

聞こえたのはそこまでだった。外に出、戸を閉めたのだ。

腕時計を見る。うん、まだ時間はある。でも化粧品の関係で長引くかもしれない。早歩きでスーパーに向かった。

「女子中、か」

足早に立ち去った宮下を見て不審に思いながらも呟く。

「俺が子供の時は女子校に男一人だけ入学！　なんて妄想を日々してたな」

「随分暇だったんですね」

背もたれに寄りかかり、背伸びをしていると隣の机に向かっている小野が呟いた。

「今もしてるぜ？　女子校の教師になるって奴をな」

「まあ、それだけ平和ってことですよ」

何やら含みをもたせて小野が言う。

「平和、か。あんな事件の後によく言うぜ」

でも、まあ、

「事件も少ないし、平和っちゃ平和なのかな。もう、事件が起きろ、何て思わないけどな」

そっいい、書類整理を再開した。

演劇部

「はあ？」

校庭では野球部が、校舎でも吹奏楽部が熱心に練習に勤しむ土曜日の午前。逆に言えば野球部のかけ声と吹奏楽部の演奏しか聞こえない静かな校舎の一室、部室に……僕の声は響き渡った。

「だから。そのシナリオでいこうって言ってるんだよ」

演劇部の部長『岡健一』は黒板の前の椅子に座りながらダルそうに答えるのだった。

『そのシナリオ』。それは、あの『校舎が戦う』という奇怪なシナリオのことだ。部長がそれを中学校で発表しようと言っているのだから……当然驚く。因みに尾崎は部室の片隅で密かにガッツポーズをとっていた。

「何だって、こんな奇怪なシナリオを？」

あの時は定期テスト前で時間がなかったから『こんなシナリオでも良いか』みたいな考えになっていたけど……今よく考えてみたらこんなのを発表するわけにはいかないのだ。

「仕方がないだろ。時間がないんだ。今から準備しないと間に合わないだろ。それに……」

こえかみを押さえて首を振りながら、

「俺たちにだって、この学校の良さなんて分からないし」

……何だか納得いかなかったけど、確かにその通りなのだ。演劇部には十人居るか居ないかというくらいしか部員が居ないのだ。まあ、大抵何処もそうだとは思っけど、とにかく今から準備しないと衣装やら背景の絵やらが大変なのだ。

「まあ、このシナリオにするにしても……衣装とか、どうするんです？」

主人公は校舎。つまり校舎の姿をしていないといけない。これは映像ではなく演劇だ。3Dなどで校舎の姿にすることは出来ない。

まあ映像でもそんな時間や技術は無いのだけれども……。

「まあ、そこは段ボールでいいだろう」

さらに、と言う。

「……」

この高校の演劇部は自分で言うのもなんだけど、レベルが高い。人数は少なくとも、毎年行う文化祭での演劇は教師や父兄の楽しみの一つらしい。今年も、まあレベルが高く、評判がよかった。そしてその例の中学生も観ていた。それなのに、こんな……。

「まあ、取りあえず進めていこうか。まずはシナリオを固めていくか」

などと、部長は指示を始めた。

十二月四日。午後一時半。

某中学校の体育館。そこは御世辞にも広いとは言えない場所ではあるけど……全校生徒二百五十人が入ってもなお空間があるほどの広さではあった。

「あー、もうすぐかー」

尾崎がステージ裏で緊張したように呟く。実際は緊張していないのだろうけど。

「さーて、もうすぐだな」

部長が段ボールで作られた校舎みたいな何かを身に纏いながら言う。その段ボールは頭を完全に囲っており、額には段ボール時計が付けてあり、口や目何かは窓になっている。

……出来は悪くない。

部長がそんな衣装を着ているのは『校舎』役だからであり、無論、度々……というか毎回役者として出る僕も勿論……、

「ほら、早くこの時計を付けろ」

『校舎』役だった。

部長から渡された時計を額に付ける。

「よし、準備は良いな？」

部長がポンポンと手を叩く。それに全員が頷く。

「よつし、じゃあ始めるか」

やがて開演を知らせるブザーが鳴る。生徒たちの談笑が止まり、静寂が体育館を包んだ。

『ぐへっへー。諦める!』

『いやー、助けてー!』

『諦めるのは貴様だ!』

『何? 貴様は誰だ!』

などといった戦隊ものに有りがちな言葉を羅列していく。

段ボールのせいでよく見えないけど……生徒たちの反応は良くも悪くもない、って感じ。普通だった。まあ、普通というのは悪い、という事なのかもしれないけれど……それでも、今回の演技は今まで以上だったと思う。シナリオがアレなぶん、演技で魅せようと思えたのだ。

「ふうつ」

ため息を吐きながら椅子に座る。その椅子というのは体育館の一番後ろに置いてある。そこは演劇部の席だった。

「よっ、お疲れ」

隣に座る部長が缶ジュースを差し出す。

「あ、ありがとうございます」

缶ジュースを受け取り、開けて飲む。

にしても……随分長い話だ。

ステージの上で話を続ける校長を見る。劇も終わり、締め挨拶をしているところだった。

取りあえずジュースを啜りながら時間を潰した

後片付け

「ふう……こんな感じかな」

背伸びをしながら、綺麗になった誰も居ない体育館を見渡す。後片付け後だった。

本来、後片付けはこの中学校の生徒がやる筈だったのだけど、何を思ったのか部長が『後片付けは演劇部がやります』とか言ってしまつて、しかもその後『じゃんけんで負けた奴が後片付けをする』なんて事を言い出したのだ。そしてまあ、僕の一人負けで――一人で後片付けをすることになったのだ。まあ、後片付けと言っても椅子などは教室から持ってきた物らしく、それらは生徒が片付けてくれたので、片付ける物は周囲の飾りだけだった。

大体……こんな感じかな。

そう思いながら鞆を手にし、体育館を出る。外は既に黄昏時だった。

今日はこの演劇の為に、演劇部は午前授業だったが、一般生徒も今頃は下校時刻であろう。

特に何にも考えずただ、帰宅しようと歩いていた時だった。

――眼前に少女が現れた。

……木原さんだった。

「どうも、お久しぶりです」

「あ……こんばんは」

そういえば、最近はまだ会っていなかった。いや、そもそも殊更、恋人同士という訳でもないのだけれど……、

「あ、そうだ……丁度良いです。これから暇ですか？」

「え？　これから、ですか……」

暇？　と聞くのだから、これから何かをしに行くのだろう。殊更忙しい、というわけでも無い。

「これからは暇ですけど」

そう答えると、木原さんは、

「そうなんですか？ 良かった！」

という感じで喜んだ。何だか悪い気がしない。

「それで——何か有るんですか？」

「はい。実はちよつと服を買おうと思って。でも、一人で買いに行くのはちよつと寂しいな、と思って……」

頭を掻きながら木原さんは言う。

「そうなんですか。それで、何処に行くんですか？」

「すぐ近場です。着いてきてくれますか？」

勿論、と答える。すると木原さんは『着いてきて下さい』と言って踵を返した。取り敢えず、僕は携帯電話を取り出して『帰りは少し遅れる』といったような内容のメールを母親に出した。

返事は『楽しんでおいで』みたいな内容だった。……少なからず、色々と察してくれているみたいだった。

買い物

「着きました。此处です」

木原さんが指差す先には、大型のスーパーマーケットがあった。中学校から歩いて十数分。案外と近場にあるのも関わらず、行った事の無いスーパーだった。

店に入り、四階にある衣服売り場に向かう。

木原さんは幾つかの衣服を手に取り、僕に「どうですか？」等と色々確認を取りながら、

「ちよつと試着してきますね」

と僕が「いいと思う」と言つた衣服を持ちながら、近場の試着室に向かった。

試着室の直ぐ隣にあるベンチに腰を降ろす。

今、こうやつて考えると……なんだか妙な感じだった。つい最近出会つた少女と買い物——こんなの、普通じゃ有りえない。でも、まあ……そんなの、考えても仕方の無い事だ。

試着室から、布の擦れる音が微かに聞こえてくる。多分着替えているのだらう。

何だか、気まずい。

少し離れようかな。

そう思つて立ち上がった時だった。

正面から、声が聞こえた。

「おい、宮下あ」

見ると、そこには高橋さんが居た。

「あ、高橋さん。どうしたんですか？」

「いやさ、今日は非番でさ。暇だったから後輩と食事した後、此处に来たんだよ」

それより、と。

「宮下こそどうしたんだ？　こんな時間に。こんな場所で」

高橋さんが僕がさっきまで座っていたベンチに腰を降ろしたので、僕も取り敢えず再度腰を降ろした。

「ちよつと買いい物です」

「買いい物？」

高橋さんが首を傾げる。試着室の前に座っていたのだから、一人の筈が無い。

「誰とだ？」

案の定、そう返ってきた。まあ、平日のこんな時間に家族と居る筈が無いと思つたのだらう。

「ええ、まあ……友人と」

頭を掻いてそう答える。

「へえ、彼女か？」

「いや——つて、何で友人を女子だと決め付けてるんですか」

「そりゃあ、何でつてお前。男と服なんか買いいに行く訳無いだろ」

「そうかな……等と思つていた時。高原さんが続ける。」

「で、どうなんだ？」

「いや、まあ……女子であることは否定しませんけど。別に彼女とかでは——」

「やつぱり？ 良いよなー彼女が居るつて」

話など聞いてないような感じだった。というか——絶対に聞いてなんか居ないと思う。

「というか……高橋さんつて既婚でしたよね？」

「若いときに付き合いたかった、つて事だよ。そうしたら色々とな

——うんうん」

何やら感慨深そうに頷き始めた。

試着室のカーテンを見る。まだ、木原さんは試着室に居るようだった。微かに布の擦れる音も聞こえる。まあ、結構多くの服を持ち込んでいたし。時間は掛かるだらう。

「——まあ、それより。前、『女子校』がどうのこうのとか言つてただろ」

「え？ あ、はい」

急に話題が変わる。まあ高橋さんは何時もそうだからそれには驚かなかったけど——話題のほうに驚いた。まさかこんな所でこんな話をするとは思っていなかったから。もう、終わった話だと思っていたし。因みに……自分なりに木原さんの女子校について調べてみたけど……全く分からなかった。調べ方すら分からなかった。「それで、その『女子校』についてなんだが。まだ、場所とか名前とか。詳しく言って無かっただろ？」

「そう……ですね」

場所を知らない僕にとっては嬉しい話題だった。そう、頷いた。

「だよな。んで、その場所は——」

その時。

試着室のカーテンがガラリ、と開いた。

「どうです？ 宮下さん」

その声到高橋さんも反応する。

試着室を見ると、木原さんが先ほど持っていた服の身を包み、立っていた。ピンクの、可愛い服だった。

「ん？ 君は確か……、」

「あ、この間はあるがとうございました」

知り合いなのか……と思ったけど、それもそうだ。財布を届けた日にその財布を取りに行ったのだったら高橋さんと会っている筈なのだ。

「木原さ——」

「どうです？ 宮下さん」

良い服は有ったのか。そう聞こうと思ったとき、木原さんはくり、と一回転してから言った。

「良いと—— 思いますよ。可愛らしくて」

妙な違和感を感じたけど、そう答える。
すると木原さんは、

「そうですか？ 良かった！」

と軽く飛び跳ねながら喜んだ。

「何だ。宮下の彼女って此の子だったのか。いや、しかし——」
等と高橋さんが妙な事を考え始めた時、衣服が陳列された棚から、
一人の男性が息を切らしながら走ってきた。

「酷いっすよ、高橋さん！ 置いてくなんて！」

その男性は高橋さんの前で止まり、肩で息をする。見たことのあ
る男性だった。以前交番に居た男性だった。

「うるさい。お前がずっとフィギュア漁りしてたからだろ」

「良いじゃないですか……」

それより、と男性は言う。

「そろそろ行きましようよ。奢ってくれる約束っすよね？」

「あー、分かった分かった。じゃあな、宮下」

そっいいながら、高橋さんは立ち去った。

食事

「じゃあこれ、ちょっと会計してきますね」

高橋さんが立ち去った後、木原さんはさっき僕が褒めた服を持って、レジへと向かっていった。

「そうだ。宮下さんってもう食事とか済ませちゃいました？」

会計を終え、帰ろうとエレベーターが来るのを待っていた時。木原さんが思い出したかのように聞いてきた。食事、とは夕飯のことだろう。

「食事、ですか？ まだですけど」

「そうなんですか？ じゃあ、どうです？ お食事にも」

「いまから、ですか？」

そう聞き返すと木原さんは「ええ」と微笑みながら言った。

時計を見る。現時刻は八時ちょっと過ぎ。今から帰っても夕飯なと準備されていないかも知れない。だから、

「じゃあ、その。そうします」

そう答えた。まあ、準備されていてもそう答えるのだろうけど。

「分かりました。じゃあ、この上の階にあるお店にでも入りましょ
うか。あ、でも……奢ったりとか、しませんよ？」

木原さんは又も微笑みながら言った。

それはそうだ。それに、例え奢ると言われても、お金を払う。

だから、

「分かってますよ」

とだけ答えた。

六階にあるお店に入る。

そこは有名なチェーン店だった。誰もが一度は入った事がある……
…そんな感じの店だった。

店員に誘導され、席に座る。四人用の椅子に木原さんと向かい合う形でだった。

店員からメニュー表を渡される。それを開き、何を頼もうか考える。

今は普段以上にお腹が空いている。あの劇をしてから何も食べて無いし、しかも後片付けまでしたのだから当然といえば当然だ。だから取り敢えず、少し大きめのハンバーグを頼んだ。木原さんは小さめのハンバーグを頼んだ。

「やっぱり……」

注文を聞きにきた店員が去ってから、木原さんがその声を漏らす。

「え？」

首を傾げると、木原さんは、

「やっぱり、この間の時は遠慮してたんですね？ ミートパスタは好物とか言つて。このお店にだってミートパスタはあるのに」

「……あ。それは、その……今日はお腹が空いていたので……、」
何やら怪しい空気を感じたので、そう答えようとしたけれど、木原さんが、

「でもこのお店。ミートパスタの大盛り版とか、ありますけど」

…… 雁字搦めだった。実際はそうじゃ無いかも知れないけど……
今の僕にはそう感じた。

どうやら、木原さんは以前僕が遠慮をした事に腹をたてているみたいだった。分かりやすく頼だつて膨らませている。

気まずい、暫くの沈黙。

その沈黙を破ったのは料理を運んできた店員でした。

「ハンバーグセットの大と小がお二つ。注文は以上でよろしいでしょうか」

さしてこの雰囲気気をとめる風もなく、無愛想に店員は言う。

「えっと……はい」

「では、ごゆっくり」

店員が会計札を置いて去っていく。

そして暫くしてから木原さんが口を開いた。

「私の事、どう思ってます？ 私は少なくともお友達だと思ってますけど」

「木原さんの事ですか？ 僕は……、」

言う前に。

「ほら」

と木原さんが言う。

「そろそろ、止めにしません？ もう、二回も食事に行く仲間なんですから。下の名前呼び合う事にしません？」

「下の名前って……」

「紗雪、ですよ。忘れちゃったんですか？」

「又も頬を膨らませる。別に忘れた訳では無かったのだけど……普通に恥ずかしかった。」

でも、尚も頬を膨らませる木原さんに見かねて、

「僕も紗雪さんの事、少なくとも友達かそれ以上だと思ってますよ」
「そう」と木原さん……いや、紗雪さんは嬉しそうに笑った。

疑惑

「それじゃ、今日はありがとうございました」

食事を終え、店から出た後。紗雪さんが言う。色々あったけど、もう怒ってはいないみたいだった。

「いえ、そんな。只買い物に付き合っただけですよ」

「でも、ありがとうございます。私はまだちょっと買いたい物があるんで。これで失礼しますね」

「え？ そうなんですか？ じゃあ――」

言う前に。紗雪さんは頭を振った。

「いえ、ちょっと遠い場所に有るんで。大丈夫ですよ」

「そうですか。じゃあ、今日は此れで。さようなら」
手を振りながら、言う。

それに、紗雪さんも「はい」と答え、立ち去っていった。
言ってから気付く。

「『今日は』か……」

また、どこかで会えると思っている。

いつの間にか彼女は僕の中で大切なものになっている。
そう気付いたのが、何だか恥ずかしかった。

「あー、疲れたー」

授業も終わった放課後の部室。尾崎が椅子に座りながら呟く。

「これ書けば終わるんだから。頑張りなよ」

隣に座る尾崎に向かって言う。

今は昨日の劇の感想を書いている所だった。

感想といってもそんな堅苦しいものでも無く、僕は只単に『巧くできた』だの『大変だった』だのと書いていた。

「そっなんだけどさー、特に書くことも……、」

「じゃあ僕はもう終わっただけで帰りますね」

愚痴をこぼす尾崎を尻目に、感想用紙を部長に渡して部室の扉を開け、廊下に出た。

背後で何やら騒がしい音が聞こえたけど、気にしないことにした。学校から出、外に出る。

何の気無しに、ポケットの入っている携帯電話の電源を入れる。着信が一件有った。

見ると……どうやら高橋さんかららしい。番号は随分前に教えていたけど、かかってくるのは珍しかった。

何か用かな。

そう思い、メモリから高橋さんを選ぶ。

暫くすると、通話が繋がった。

「もしもし。高橋さんですか？」

「おっ、宮下か？ どうした」

「どうしたも何も……電話、かけてきたじゃないですか」

「はっはっはっ、そうだったそうだった」

笑いながら高橋さんが言う。

「それで。なんなんですか？」

「いや。昨夜女子校の事、色々あつて言えなかつた。だから今言おうと思つてな」

「女子校の事、ですか？ そんな、いちいちそんな事しなくても」
実際、もう殆ど諦めていたし。

「それでも、一応警官だからな。まあ、黙って聞いとけ」

その中学校は南区の五丁目にあるらしい。この学校から車で数分の所にあるらしい。

……中学？

「え……っと。僕が探してるのは女子高なんですけど。高校」

「女子高？ 何だ、そうだったのか。だけど女子校はこの付近にはないぜ。車で数時間の距離の所にならあるけどよ——」

付近には……無い？ そんな筈は無い。紗雪さんはこの付近にあると——。いや、もしかしたら只の聞き間違いかも……、

その折。

正面から声がした。女性の声。

「あつ、享さん」

いかにも偶然、という雰囲気を出しながら、前から歩いてきた。僕は無意識に通話を切っていた。

「こんにちは。今日って暇ですか？　これから――」

「いや、その、今日は――」

「暇、ですか？」

腕を掴みながら、言う。

優しく、言う。

――優しいのは、言葉だけだった。

腕を掴む力は強く……僕を見つめる目は、鋭かった。

確信は無い。ただ、彼女の言う高校が無かったただけなのに……彼

女の、紗雪さんの行動が――全て恐ろしく感じた。

不審

「——ねえ、享さん^{しょうさん}。これ、どうです？」

高校から——僕の住む町から遠く離れたスーパーの衣服売り場で、紗雪^{さゆき}さんは言う。

頗る^{さうじやう}明るい笑顔で。

……結局、断れなかった。

断れる筈^{はず}が無い。

断ったら……どうなるか分からない。

でも、それでも。

こういう明るい姿を視ていたら——さっきの出来事が嘘のように思えてくる。

多分、夢だったのだ。そう——思えてくる。

でも——違うのだ。さっきの出来事は本当にあった。それは間違いない。

だったら、僕の勘違いなのだろうか。

さっきの腕力。そして、視線。

それは只単に僕と一緒に買い物がしたくて、それを断ったから——

「享さん？」

「えっ？ あ、」

その声は聞こえていたし、意味も理解していた。でも、忘れてた。考え事に集中していて——返事を忘れていた。

紗雪さんは今の時期には似合わない、すこし薄めの服を持ち、指し示しながら言った。

「いいと………思いますよ。似合っているとお思いますし」

「えーっ、本当ですか？」

冗談まじりに、紗雪さんが言う。

本当は似合わないと思う。

紗雪さんも、自覚しているのだろう。

——じゃあ、聞かなきゃいいのに。

普段ならそうは思わないだろう。

けど、今はそう思う。

でも——そうだとは、言えない。

「ええ。似合っていると思いますよ」

そう言つと、紗雪さんは「そうですか」と言つて、その服を元ある場所に戻した。どうやら、買う気は無いらしい。そして、

「これから、暇ですか？」

そう、言つた。

……断ることなど、出来なかった。

「暇……ですけど」

「そうなんですか？　じゃあ、これから行きませんか？」

紗雪さんは、微笑みながら言う。

「行くって……何処にですか？」

「——ラブホテルに、です」

それは冗談でも何でも無く。

本気だという事が——その目を視る事で、理解出来た。

普通ならこんな誘いなんて、断る。
当たり前というように。

何を言っているんだというように。

でも——断れない。

——相手が、紗雪さんだから？

そんなのは——違うんじゃないのか？

本当は、只期待しているだけなんじゃ——

「着きましたよ、享さん」

眼前には、小さな建物が有った。

今はもう、夜だ。暗い照明のせいでよく分からないけど——どう
やら、目的の場所らしい。

結構歩いた。じゃあ、もう此処は僕の知っている場所では無いはずだ。

「じゃあ、行きましょう」

と。紗雪さんが僕の腕の袖を引っ張り、中に入る。

中は、静かだった。

人が居ないんじゃないかと言う程に静かで、暗くて。
不気味な——感じだった。

「じゃあ、ちょっと待ってて下さいね」

そう言つて、紗雪さんは何やら近くにある機械に向かった。
どうやら受付の人などは表に居ないらしく、機械などで精算を済ませるらしい。

行つた事が無いから分からないけども。

「終わりました。じゃあ、行きましようか」

作業が早かつた。

ひよつとしたら、慣れているのだろうか。

……別に慣れていたからつて――

「あれ――紗雪さん。こういう場つて、未成年とかが来ちゃいけないじゃ……」

「え？ あ――はい。そうみたいですけど……。まあ、別に良いんじゃないでしょうか」

紗雪さんはそういう、通路の奥へと進んでいった。

それに着いていく。

ここで逃げるといふ選択肢もあつた。

でも、ここまできたら……もう、自分でも分かっていた。

自分の気持ちに、気付いていた。

期待している、という事に。

部屋に着いて荷物を置いた直後、急に紗雪さんが僕をベッドに押し倒してきた。

「……紗雪さん」

紗雪さんが危険な人だとか。

そんな考えは――もう無かつた。

だから、従つた。

抵抗なんてしなかつた。

「享さん。私――」

紗雪さんが続ける。

「私、母親を殺された事があるんです」

「え？」

意味が分からなかった。

いや、話の意味は理解できる。

でも……今、この場でその話をする意味が分からなかった。

「殺した相手というのは、私の嫌いな父親でした。生活に疲れたから。そんな理由で、それだけの理由で——私の大好きな母親は殺されました」

だから、と。

「だから——私は決心したんです。その時から、この世の全ての男に復讐をしよう」と

ずぶり、と。

何かが突き刺さった音がした。

「え——」

どこから……？

腹部に違和感。腹部に目をやる。まさか——

「——！」

全てを理解した時、痛みが全身を駆け抜けた。

……腹部には文化包丁が刺さっていた。

そしてそこから、大量の血が——！

痛みを堪えるようにベッドから転げ落ちる。

……紗雪さんがこの部屋から出て行くのが見えた。

……何が起きたんだ？

訳が分からない。急に刺された。

母親が殺された？ その復讐？

言ってる意味が——

「いつ……」

そんな事を考える必要は無いのかもしれない。いや、無いのだ。それにこの身体の痛みじゃ——考える事だつてうまく出来ない。

——いや。

身体の痛みなんて……ないのかも知れない。

あるのは、心の痛みだった。

信じてた人に、好きだった人に裏切られた心の痛みの方が大きいのだ。だから身体の痛みなんて感じなかった。

——ねー、知ってる？ この間この付近で殺人事件があったって

何時だったか、女子生徒がそんな話をしていた。

もしかして、この事件の犯人って——

何だ、そうか。心の痛みを感じる必要なんてないのか。だって、最初っから彼女は僕の事なんて信じてなかったのだから。

でも、そう考えたら今度は身体の痛みが強くなってきた。

……わがままな身体だ。

普段ならこのわがままをきくところだろうけど……残念ながら、今はきけない。やりたい事があるのだ。

ポケットから携帯電話を取り出す。一緒に何かが落ちたけど、そんなのは今関係ない。

警察に通報しなくてはならない。

この世の男に復讐する。そんなのは無理だ。

でも、或いはあと一人ぐらいなら——殺してしまうかもしれない。だから、警察に通報しなくてはならない。もう二度とこんな事を起こさないように。

「っ……」

上手くキーが押せない。手がぶれてしまう。痛みで力が入らない。これじゃあ、警察に——

その時、壁についている電話が目に入った。

受付の表に人が居なくても、裏になら居るんじゃない……。

携帯電話を投げ捨て、その電話に向かう。

電話を払うように取る。多分、直接繋がる筈だ。

「……助けて、くだ……、」

……痛みで、もうそれしか言えなかった。

冬というのはやっぱり寒い。

病室の窓際にあるベッドに横になりながら僕は思う。

結局、生き残った。

比較的に傷が浅く、更にあの電話を聞きつけた受付の人が即座に警察に通報をした為、幸いにも死には至らなかった。

そして僕を刺したあの女も見つかった。死んだ姿で。

事情聴取の際に聞いた話では、どうやら犯人捜索中に見つかったらしい。それが他殺か自殺かはまだ分かってないらしい。よくは、聞いていないけれど。

……別にそれを聞いたからって、どうも思わなかった。

死んだからって、悲しくはならなかった。

逆に、これ以上犠牲者が出なくて良かったとさえ思った。

好きだったけど、それはもう昔の話だ。過去形だ。

だから、もう忘れよう。

彼女と出会ってからの事、全てを。

LH（後書き）

何なんだろうなあ、これ……なんて思いながら完結させました。一度投稿しちゃったんだから完結させないなんて感じて。

何だか、プロットの時と随分違うなーと思います。

やっぱりこういうジャンルは向いていないのかな……。

いや、只単に力が……ぐふう。

まあ、これを教訓に次回から頑張りたいと思います。

この作品を読んでくれた方々には感謝です。

ありがとうございます。

因みに『LH』は『last heart』の略です。

あの木原紗雪も主人公の事が好きだったみたいな。

もう少しちゃんとしたタイトルを付けられたらなあ……。

いえ、あのホテルの略じゃないですよ。本当です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4868o/>

LH

2011年9月4日03時44分発行